

# 言語獲得にみられる事態把握と場の言語学

櫻井千佳子（武蔵野大学）

## 1. はじめに

日本語と英語の事態把握の違いとして、ナル的な言語とスル的な言語（池上 1981）、「ある言語」と「する言語」（金谷 2004）など、岡（2013）でも指摘されているように、日本語は事態をコトの生成（存在）を基本にして解釈するのに対し、英語は事態を状態が変化するという他動的関係や因果性によって解釈するということが言われている。このような事態把握の相違を、言語獲得研究に照らし合わせて考えると、「異なる言語の話し手は、言語を獲得していくプロセスにおいて、異なる事態把握をするようになるのだろうか」という言語と認知の関係についての問いに答えることができる。

本研究では、同じ出来事を描写している3歳児、5歳児、9歳児の日本語と英語のデータを比較することによって、言語の発達段階における事態把握の傾向を比べる。特に、3歳児のデータに注目することにより、英語でも、必ずしも事態を他動的関係によって解釈しているわけではなく、他動的関係にはこだわらず事態をまるごと成立するものとしてとらえている言い回しが使われていることを示す。さらに、このことが、井出（2006）で言われている日本語の語用論の原理の解明に不可欠な場の要素とどのような関係にあるのかを論じる。

## 2. Frog Story の研究

本研究のデータは、Berman and Slobin（1994）のFrog Storyの言語獲得研究プロジェクトによるものである。この研究プロジェクトでは、“Frog, where are you?”（Mayer, 1969）という文字のない24枚の絵によって構成されている絵本を被験者に見せて、話の内容について語っているデータを様々な言語で様々な年齢の被験者から収集し、同じ出来事を表現しているナラティブの言語間の比較、また、発達段階を追っての比較を行っている。（絵柄については図を参照）。このSlobinらによる一連の研究では、“thinking for speaking”という言語使用レベルにおける言語相対説を唱えている。これは、子供は獲得する母語の文法的な特徴により、その言語の「発話のための思考」をするようになるという考え方である。

本研究では、状態変化をどのように解釈するのかを日本語と英語で比較するために、他動性の高いシーンについて注目し、そこでは、他動的関係がどのように言語化されているのか、またはされていないのかを、発達段階を追って分析する。

### 3. 事態における他動的関係の認知と表現

シカが少年と犬を崖から突き落とす、という他動性の高いシーンにおいて、その他動的関係はどのように言語化されているのだろうか。

- (1) Then it turns out they're a deer's antlers, so- and he gets- he lands on his head and he starts running. And he tips him off over a cliff into the water. And he lands. [9;5]
- (2) 男の子はいたずらをしていたのですが、シカを怒らせてしまい、池の中に落ちてしまいました。[9;9]

上記の例のように9歳児のデータでは、英語では、動作主（シカ）、被動作主（少年）が agent と patient という格で示されているものが多くみられ、日本語では、シカを怒らせた結果として少年が池の中に落ちてしまったというような表現がみられている。これは、英語では動作主が被動作主に働きかけることによる状態変化を示す捉え方をしているのに対して、日本語では結果として少年が池の中に落ちていることを捉えていることを考えられる。

このような英語と日本語による相違は、発達段階の早い時期にもみられるのだろうか。

- (3) And this time – male deer got the um – the boy and threw him over a cliff into a pond. [5;10]
- (4) 男の子がシカにのっかっていて、沼におちてしまいました。[5;10]

上記の5歳の被験者のデータは、英語と日本語の同年齢帯のデータの典型的なものである。ここでも、9歳の表現と同様の捉え方の相違がみられる。

さらに、年齢の低いデータでは、下記のように、英語でも日本語でも、シカが男の子と犬を突き落とすという他動的関係が表現されていない。

- (5) A reindeer! And then they all splash into the water. [3;9]
- (6) シカがずっといってて、男の子とわんちゃんがびしょぬれになっています。[3;11]

上記は、英語においても、他動的関係を捉えていることを示す表現が使われていないことを示している。これは、言語獲得の初期段階において、出来事の他動的関係を把握することが認知の中心的な側面であるとする考え方に疑問を呈するものである。つまり、岡（2013）で指摘されているように、言語獲得の初期で出来事に因果関係を見出すべく事態把握することが成立していると考えることに疑問を呈し、出来事の因果関係にはこだわらず事態をまるごと成立するものとしてとらえていることを提案するものである。

#### 4. 事態把握と場の言語学

本研究では、同じ出来事を表現している言語データを日本語と英語で比較することによって、他動的関係が示されているような場面について、それぞれの言語でどのように表現されるのかについて考察をした。9歳児、5歳児の言語データは、英語においては他動的関係が明示されるような言語表現がみられる一方、日本語においては、その出来事の結果に注目し、他動的関係が必ずしも明示されていないことを示した。このことにより、その言語に特徴的にみられるような事態把握が5歳という言語発達段階で獲得されていることを示していると考えられる。さらに、3歳児の言語データは、英語においても、動作主、被動作主について言及することなしに、他動的関係を捉えず、事態をまるごとで成立するものとしてとらえている視点を反映した言い回しが使われていることを示した。

場の言語学では、言語の話し手は場に依存して場の中に存在すると考える。そこでの出来事の捉え方は、その場所で起こった出来事をまるごとで捉えるものである。対して、ある主体が対象に対して働きかけを行い変化を与えるという他動的関係が明示されるような出来事の捉え方は、場から離れて存在する話し手の視点である。このような概念は、場所的捉え方＝日本語の論理、個の捉え方＝英語の論理として、対立するもののように捉えられがちであるが、岡（2013）が指摘するように、場所的思考が基底的で、個の思考がある、と考えることができよう。本研究では、初期の言語獲得のデータをみることによって、言語使用の基底には、日本語においても英語においても、言語の話し手が場の中に入り込み出来事を捉えるという場所的思考がある可能性を論じた。

\*本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（研究代表者：大塚正之）「言語コミュニケーションにおける場の理論の構築:近代社会の問題解決を目指して」（2011年度-2013年度）の交付を受けたものである。

#### 参考文献

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

井出祥子（2006）『わかまへの語用論』大修館書店

岡智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房

金谷武洋（2004）『英語にも主語はなかった』講談社

Berman, R. A., & Slobin, D. I. (1994). *Relating events in narrative: A crosslinguistic developmental study*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Dial Press.



Mayer, M. (1969). Frog, where are you? New York: Dial Press.